

おこしやす秋の京都へ  
ちよつと暮らしてみる京都

**1988と89年に、京都で滞在型の「京都特別プログラム」を開催したことがあります。この試みを、ふたたび新たな視点で実施することになりました。その企画の意図と経緯についてお話しします。**

## 京都は「第2のふるさと」

兵庫県宝塚市の高校を卒業後、京都で学生時代をすごしました。(それもなぜか5年間?) 茅ヶ崎市に1年いたあと東京で暮らすようになりましたが、青春時代の思い出が残る京都は、私にとって今も「第2のふるさと」とよべる存在です。暮らしの軸足を東京においてからも、季節ごとに京都に足を運ぶのは、私の数少ない趣味のひとつでした。80年代後半から90年代にかけて、関西への出張の合間をみては京都に立ち寄り、学生時代にいけなかった少し高級なお店に行ったり、大学のグラウンドに顔を出したり、懐かしい食堂や行きつけの喫茶店を訪ねたりしていました。

大学移転による  
学生の街の変化

90年代半ば頃から、街の様子が少し変化してきているのを感じていました。昔懐かしい下宿屋さんや銭湯、学生向け食堂などが行くたびに姿を消していたのです。暮らしが豊かになり、かつての下宿から台所や風呂付のワンルームマンションに暮らす学生が増えたこともあるでしょう。また経済不況から近隣の学生は下宿させてもらえないケースが多いとも聞きました。しかし同時に、同志社大学が京都府南部の京田辺にキャンパスを移し、立命館大学が滋賀県に琵琶湖草津キャンパスを新設するなどして、市内に下宿する学生が減ったという影響もあるのではないかと私はひそかに感じていました。

これからの京都の学生は  
エルダーだ!

仕送りで暮らす下宿生が、年間100万円のお金を京都に落とすと仮定すると、学生が1000人減ったら、年間10億円のお金が京都の街にまわらなくなります。「だから下宿や食堂がつぶれるんだ!」と勝手に思った私は、当時の京都市の観光部長さんに、釈迦に説法と知りつつ京都の魅力を語り続け、「新たな学生としてエルダーを京都に招きましょう」と提案したのです。

かつて京都で学生時代をすごした方、京都暮らしの経験はないけど一度は暮らしてみたいと夢を描いている方など、きっと相当いるに違いないと、私はこれまた勝手に想像していました。なにを隠そう、私自身、将来、京都に暮らしたいと考えていたからです。

そして生まれたのが京都に滞在して京の歴史や文化にふれる京都特別講座「京都百景」(1988年開催)だったのです。

⇒京都に暮らしながら学ぶ「京都特別講座」はP10



オーストラリアのパートナー・デニスと(京都)

大社 充  
Okoso Mitsuru

1961年宝塚市生まれ。京都大学在学中はアメリカンフットボール部のQBとして活躍し、京大初の全国優勝に貢献。卒業後は、松下政経塾で「高齢社会と生涯学習」をテーマに研修し、1987年からエルダーホステル協会の創設に参画。1995年、専務理事に就任。短大の講師、毎日放送ラジオ深夜番組のパーソナリティ、神奈川ゆめコープ理事なども経験。2004年2月にエルダー旅倶楽部を設立し、現・理事長